地域政策学ジャーナル
2018，第７巻 第２号，75-77

フィールドワークから考える

高橋　貴

From the Viewpoint of My Fieldwork

Takashi Takahashi

私がこれまでに世界各地で行ってきた拙いフィールドワークの経験から二, 三考えてみたいと思います。

最初にフィールドワークに関心をもったのは大学1年生のときでした。当時は大学紛争華やかなりしときで，授業はなく，何を専攻しようか悩んでいました。たまたま柳田国男の『遠野物語』を読んで，非現実的な世界が学問の対象になると知ってたいへん驚きました。というのは私の両親は岩手県の出身で，夏休みに帰省したとき，似たような世界を実感していたからです。夜になると庭先をきつねの嫁入りが通るといわれたり，いたずらをすると「ヤズのオンツァ」が来てさらっていくぞと脅かされたり，などです。家はカヤ葺きで，井戸水を汲んで薪で風呂をわかし，かまどでご飯を炊き，馬を飼い，便所は別棟でした。主人夫婦の寝室ナンドは子ども心に暗くて気味の悪い部屋でした。しかし私はその家と人びとが大好きで，小学校の低学年から大学生になっても，夏休みはほとんどこの実家で過ごしました。

大学では柳田國男を読む会を10人ほどの学生で組織し，福島県の飯豊山麓で何回かフィールドワークを行いました。空き家になっていた造り酒屋が宿舎でした。そこは文化人類学の佐藤信行先生の奥様の実家で，だれに気兼ねもせず，学生だけで自炊しながら自由に楽しく過ごしました。この調査では今でも忘れられない苦い思い出があります。村の住人の戸籍それも明治時代の壬申戸籍を調べて系譜をつくったのですが，そこからある人の養子縁組の事実を知られてしまいました。その家族から苦情がでて，私たちはひどく落ち込みました。しかしこうした失敗を重ねながらも私たちは少しずつ成長していったと思います。

初の海外調査は1973年，ネパールでのトレッキングでした。シェルパとポーター3人を引き連れて2ヵ月間ほど山歩きをしたのです。そこでの経験はすべてが新鮮でした。天に至るまでの棚田，雪をいただくヒマラヤの峰々，茹でたじゃがいもやバター茶の味，荘厳なチベット仏教寺院での儀礼など今でも鮮やかに蘇ります。サガルマータ（エベレスト山）近くに位置する寺院には雪男の手の骨が保管されていました。見せてもらい，写真も撮りましたが，この骨はその後行方不明になったと聞いています。現地では雪男雪女は実在し，恐ろしい存在と考えられています。かれらが家の中に入ってこないよう，入口や窓は小さくつくられています。そこにはまったく異なる世界が広がっていました。

海外のフィールドワークではできるだけ普通の家に泊めてもらうようにしています。その方が人間関係，仕事，儀礼などがよくわかるからです。かつてはホームステイ・ビジネスなどないため，宿泊先は，友達の，友達の紹介・・・というようにして探しました。滞在期間は1～4か月になることも多く，受け入れ先のご家族にはたいへんご厄介になったと改めて思います。

1980年ごろ，私は愛知県の野外民族博物館リトルワールドの研究員でした。インドネシアのスマトラ島に住むバタックの家屋を移築する計画が持ち上がり，さっそく現地に入りました。滞在先として，美しいトバ湖岸の集落に目をつけました。その理由

の一つは伝統的な家屋が残っていたことですが，それ以上に近くを流れる小川の最上流部，つまり山に近いところに位置していたことが重要でした。このあたりの集落には水道やトイレがありません。水浴や洗濯も含めてすべて川の水に頼っていました。つまり下流に行けば行くほど水は汚染されているのです。一人の青年に助手兼通訳をお願いし，かれの家の一部屋を借りました。2か月ほどのあいだ，日中はオートバイで村々をまわり，夜はことばを学んだり，地域の情報を聞いたりし，実に有意義な日々を過ごしました。やがて移築にふさわしい家屋も見つかりました。所有者，親戚，村長との交渉，さらには北スマトラ州知事や国の教育文化省から許可を得る際にもかれにはずいぶんと助けてもらいました。その後，日本人を世話し，役人とうまく交渉したことが評価されたのか，かれは郡長に選ばれて10年ほど務めました。退職後は家の隣にキリスト教会を建て，牧師として活躍しています。なお，この家屋は現在，リトルワールドで「トバ・バタック族の家屋」として展示されています。

もう一つ，モロッコの例をあげてみます。これもやはりリトルワールド関連で，牧畜民のテントを調査収集するという仕事でした。草原を車で走り，やっと1棟のテントを見つけました。近づいてあいさつすると，以外にも笑顔で迎え入れてくれました。そこには夫婦と20歳前後の娘2人が住んでいます。町に住宅がありますが，テントの方がはるかに快適だと言うのです。水場は遠いし，不便と思うのは「文明人」である私たちのかってな思い込みでした。すぐに湯を沸かし，甘いミントティーを淹れてくれました。お茶を飲みながら考えさせられる話を聞きました。日本ではラジオ，テレビ，ビデオ，CDなどと，少しずつ情報機器が発展してきましたが，ここでは違いました。パラボラ・アンテナ一つあればヨーロッパの放送が直接入るのでどんな番組でも楽しめるというのです。草原や砂漠の果てまでグローバリズムが浸透していることを実感しました。そういえばインドでも似たような話がありました。テレビ放送は政治家の演説かインド舞踊ばかりでおもしろくない，アメリカのハリウッド映画がみたい。そのためにビデオ・デッキが欲しい。その要望に応えるべく，パル・システムのデッキを5万円で購入して持参したのですが，その関税はなんと300%。15万円の自腹を切った，という苦い思い出です。

こうした私の経験からいくつかのことが確認できます。まず地球には多様な環境があり，それに適応したさまざまな生活があるということです。ときに驚いたり，不便を感じたりすることはありましたが，各文化に優劣の差はないと思います。どこでも「住めば都」であり，たとえ過酷な環境でも人びとは工夫をして生きています。したがってどの文化も尊重されるべきだと思います。文化について司馬遼太郎は興味深いことを言っています。「文化は不条理なもので，特定の集団（例えば民族）においてのみ通用する特殊なもの」。たしかに他者の文化はしばしば不条理にみえます。インドの美しい女性が食事中にゲップをすることにはどうしても違和感を覚えます。しかしインド人にとって「ゲップはおいしいことの表現」と知れば少なくても頭では理解できます。フィールドワークはこのように心と頭の葛藤の連続と言っていいかもしれません。もう一つ，底の丸い土器というのはどうでしょうか。これを私たちの台所に置くと倒れてしまい使い物になりません。ところがアフリカやインドではたくさん使われています。頭に乗せて運びやすいし，土の床や三ツ石かまどには安定して置くことができるからです。燃焼効率も良さそうです。そこには多様な考え方と多様な生活があります。異文化に接すると，発想の転換や柔軟な思考の必要性を痛感します。司馬遼太郎は文明についても語っています。「誰もが参加できる普遍的なもの，合理的なもの，機能的なもの」。この場合の文明はグローバリズムと言い換えても良さそうです。モロッコのパラボラ・アンテナのように，誰でもが参加できる世界は今，急速に広がっています。文化と文明，あるいはローカリズムとグローバリズムのあいだでどのように調和を保っていくか，今人類に課された大きな課題だと思います。

世界を歩いて今さらながら驚くことがあります。それは村や家庭で嫌な思いをしたことがほとんどなかった，ということです。ものを盗られたことはないし，外国人ゆえに非難されたこともありませんでした。私が接した人びとは，仲間としてときには家

族として受け入れてくれる心の温かさがありました。南インドの祭ではヒンドゥー教徒，キリスト教徒，アウトカーストの人びとが仲良く祭の準備をしていました。そこには民族，宗教，カーストの対立はみられませんでした。国際社会では紛争やテロが目立ちますが，多くの人びとは矛盾を抱えながらも平和にくらしているのです。

結局，人の幸せとは何でしょうか。ブータンにはGNH（国民総幸福量。持続可能で公平な社会経済開発，環境保護，文化の推進，良き統治の４つの柱で構成される）というすばらしい考え方があります。また「できるだけシンプルに暮らし，家族と時間を過ごすこと」(朝日新聞 2018 年 1 月 7 日朝刊）といったアメリカ人の考え方も良いと思います。私が注目しているのはドイツのフェライン（クラブ, 同好会）です。ドイツでは地方の小さな村や町がきれいで，活気があることに気づきます。人びとが楽しく生き生きとしているのです。その根幹にフェラインがあると考えています。たとえばシュヴァルツヴァルトにある人口４千人の町シルタッハにはフェラインが40 ほどあります。筏乗り，魔女，フォークダンス，釣り，歴史，オートバイ，果樹園芸，婦人会などのグループで，同好の士が集まって楽しく活動しています。筏乗りフェラインではかつての栄光の歴史を掘り起し，ミュージアムをつくって筏フェスティバルまで主催しています。これは今では町の大きなイベントになりました。魔女フェラインもミュージアムの展示制作に協力し, ファスナハト（カーニバル）では大活躍しています。

私のフィールドワークは，大学時代の研究会に始まり, ドイツのフェラインでいったん幕を閉じます。どちらも横の自由な人間関係が原点であり，これが今後，日本の地域再生の鍵を握るのではないかと思っています。そのための活動に少しでも加わることが今の私の願いです。